

国立大学法人 東京農工大学
農学部附属硬蛋白質利用研究施設報告 第52号
(開設40周年記念式典・祝賀会特集号)

**Report
of
the Scleroprotein and Leather Research Institute
No. 52
2009**

**Scleroprotein and Leather Research Institute,
Faculty of Agriculture
National University Corporation
Tokyo University of Agriculture and Technology
Fuchu, Tokyo, Japan**

目次

沿革

挨拶

西山敏夫 施設長
小畑秀文 学長
國見裕久 学部長

来賓祝辞

衆議院議員 西川公也 先生
文科省研究振興局 磯田文雄 局長
経産省製造産業局 細野哲弘 局長

祝電

衆議院議員 林田 彪 先生
本学名誉教授 白井邦郎 先生

祝辞

日本皮革技術協会会長	杉田正見様
茨城大学 教授	米倉政実様
(株)中華・高橋 代表取締役社長	高橋 滉様
(株)資生堂	天野 聡様
(株)日本航空 機長	塚本裕司様

出席者名簿

決算

あとがき

東京農工大学農学部附属硬蛋白質利用研究施設の沿革

硬蛋白質利用研究施設は、昭和 44 年 6 月農学部附属皮革研究施設として設置された。

1. 設立の沿革

皮革の生産は、昭和 20 までは、主に軍需用として国策と結び付けられていたが、戦後民需の急速な成長に伴い、多数の小規模単位の産業構造が形成されたために、知識情報の革新活動が脆弱で、産業的利用基盤を支える基礎的研究、新技術開発および国際対応が強く求められていた。昭和 30 年代には、皮革科学技術の発展、硬タンパク質の基礎科学および産業利用、研究交流、環境保護等に関して、21 大学、通産省東京工業試験所第七部（以下東工試 7 部）を始め 9 公的研究機関で、日本皮革技術協会における学術活動、JIS、ISO 等の行政活動との連携を通じて推進された。しかし、東工試 7 部の廃止決定で、研究および国内産業界との連携や国際的対応が決定的に弱体化することから、通産省、文部省、産業界の協議で、多くの研究実績がある本学農学部にも、国立の研究施設を設置して皮革関連分野の研究教育の推進とこれまでの役割を継承させることとして、通産省から教授相当職 2 席を文部省に移管し、文部省は助教授 2、助手 2、技官 1 席を純増で配置する異例な措置によって、2 部門からなる皮革研究施設が設置された。

2. 充実と発展

専任研究員の他に、本研究施設の活動と運営への助言と参画を行う兼任研究員および助言を行う参与研究員を置く制度を整備した。

昭和 51 年 4 月、多くの研究成果を基にして研究内容、特に硬タンパク質の研究と教育および産業面への応用という社会的要請に一層適切に対処できるように、本研究施設の名称変更および組織の整備を行った。

(旧) 皮革研究施設	→	(新) 硬蛋白質利用研究施設
基礎皮革研究部門		硬蛋白質基礎研究部門
応用皮革研究部門		皮革研究部門

例えば、硬タンパク質組織の改変や改質、コラーゲンの分子構造と材料科学、コラーゲンの線維構造制御、ケラチンのタンパク質化学、細胞レベルの生物学的機能の解析と制御、プロテオグリカンの構造機能、原料皮の品質鑑別、環境負荷軽減を目指した皮革製造諸工程の最適化、副生物の高度利用、革製品の消費科学などが強化された。また本研究施設が主体となって、全国規模の通産省の産学官共同研究プロジェクトを 27 年間推進し、産業対策上も多くの有益な実用的成果を生み出した。学部および大学院（修士、博士）教育にも設立当初から積極的に参画し、授業担当、論文指導を行って人材の養成に貢献するとともに、一般社会人を対象とした文部省の公開講座を多数主催し、また、学識経験者として国および地方自治体等の委員も多く務めてきている。これらの活動は、年 1-2 号発行する「硬蛋白質利用研究施設活動報告」で公表し、平成 15 年、現状と課題を総括した上で硬タンパク質を中心とした生物機能制御にかかる研究に一層積極的に取り組み、総合的動物資源利用科学の研究機関と呼ぶべき我が国唯一の研究施設を指向すべきことを展望した。また、参与研究員による外部評価を毎年実施し、今後の改善に役立てている。

平成 16 年からは、東京都皮革技術センター、日本ハム（株）中央研究所および（株）ニッピバイオマトリックス研究所との間に研究協力協定を締結して客員教授等を迎え、皮革および関連高分子利用分野の研究、食肉生産に伴う硬タンパク質資源の高度利用研究およびマトリックスタンパク質の機能開発研究のより一層の充実とこれらの分野の学術および科学技術の発展を図っている。本年（平成 21 年）、創立 40 周年を迎え、特色ある研究拠点としてさらなる発展を展望している。

挨拶

(1) 東京農工大学農学部附属硬蛋白質利用研究施設

西山敏夫 施設長挨拶

本日は、私たち東京農工大学 農学部附属 硬蛋白質利用研究施設の設立40周年記念式典ならびに祝賀会に、150名以上の多くの皆様にお集まり頂き、誠にありがとうございます。設立40周年という記念すべき時に、幸いにも施設長を務めさせていただいております、私、西山より、研究施設を代表いたしましてご挨拶させていただきます。先ずはじめに、ご多忙にもかかわらず、ご来賓としてご列席を賜りました、文部科学省 研究振興局 磯田局長、小山研究調整官、経済産業省 製造産業局 進藤課長にお礼申し上げるとともに、



本学の小畑学長、笹尾理事、竹本理事はじめ本学関係者や、本研究施設の歴代の教職員の皆様、さらには、長年に亘り、本研究施設の業務運営や研究推進に、ご指導、ご鞭撻や、様々な局面においてご支援いただきました関係各位の皆様に対し、心から感謝の意を表したいと思っております。皆様のお手元にお配りしたパンフレットに、本研究施設の設立当初からの施設沿革や活動内容を記載しましたので、ご覧頂ければと思います。本研究施設は、アカデミック（学界）ならびに産業界からの強い働きかけがあり、当時の通産省からのポスト移管を含め、文部省の格別のご支援で、当時、関連研究 分野に実績のあった本学農学部にて、ちょうど40年前の昭和44年6月、皮革研究施設として設置されました。本研究施設は、(1) 皮革および関連産業に対する学術的、技術的支援、ならびに人材育成に寄与する研究・教育、(2) 動物生産の副産物の主成分であるコラーゲンを始めとする硬タンパク質資源の総合的高度利用に寄与する研究・教育、を行うことを目的に、わが国で唯一の研究施設として設置されたものであります。その後、研究活動分野の発展にとともに、昭和51年4月に硬タンパク質研究の充実と拡大、さらには、産業面への社会からの要請に対し、学術的にも適切、かつ、迅速に対処できるように、施設名称を硬蛋白質利用研究施設に変更して、基礎から応用への研究内容の充実と拡大を図り、今日に至っております。本研究施設がこの間、一貫して硬タンパク質ならびに生体関連タンパク質資源の総合的高度利用に係る研究を鋭意推進し、多くの先導的研究成果を上げ、学部・大学院の教育を通じて多くの人材の育成に貢献するとともに、長年に亘り全国規模の産官学共同研究プロジェクトを推進し、産業対策上も多くの有益な実用的成果を生み出し、社会の要請に応えてまいりました。本研究施設は今後も、ここにご参列いただきました皆様をはじめ、関連・関係機関の皆様のご支援を賜り、硬タンパク質を中心とした動物資源の高度な有効利用に向けた応用研究や、硬タンパク質の新たな機能解明などの先進的な基盤研究に裏付けされた応用開発研究を通して、学術的な先進性はもとより、常に、社会ニーズに柔軟に対応できるように、日々研鑽を重ね、特色ある研究拠点として大きく発展できるように、今後も研究員一丸となって頑張っていく所存でございます。また、たまたま偶然ではありませんが、今年、硬蛋白質利用研究施設の耐震補強工事ならびに内部設備の改修工事が行われ

ることになり、今週から工事が始まっております。ご存じの方も多いと思いますが、私たちの研究施設は、今までの長い歴史を刻んだレトロな感じが特徴の施設でしたが、今年の9月末にはリニューアルされた綺麗な研究施設ができあがることとなります。設立40周年という節目の年に、関係各位のご努力により、研究施設がリニューアルされるということは、私たちにさらに大きく発展しなさいと言われていたような気がして身の引き締まる思いがいたします。農学部においでの際に、是非、お立ち寄りいただければ、最新の研究と優秀なスタッフ、そして新装開店した研究施設でお迎えできると思います。本日は2時間という限られた時間ではありますが、ご参集頂いた皆様で、「硬蛋白研」の過去を懐かしみ、現在を熱く語り、そして、未来に夢馳せて頂ければ幸いです。私たちの硬蛋白質利用研究施設がこれからも、硬タンパク質の基盤研究から応用研究、さらには先進的な高度利用研究を通して、使命志向型の特色ある研究拠点として大きな発展を図っていきたくと考えておりますので、今後も、皆様の暖かいご支援、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

以上、施設を代表いたしまして40周年記念式典ならびに祝賀会の挨拶とさせていただきます。

平成21年5月16日

東京農工大学農学部附属硬蛋白質利用研究施設
施設長 西山 敏夫

(2) 東京農工大学 小畑秀文 学長挨拶

ただいまご紹介頂きました小畑でございます。
先ずは、硬蛋白質利用研究施設の40周年を心よりお祝い申し上げます。

40年前と言いますと、昭和44年ですから、私が修士課程をちょうど終えた時にあたります。東京大学の入学試験が中止されるなど、全国の大学が騒然とした雰囲気の中にあっただと思います。その年に私はちょうど修士課程を終わりましたが、当施設が同じ時期に完成したと言うことは何か複雑な思いがいたします。

それから40年になります。『長い』と言いますと、自分が歳を取ってしまったということと結びつくので『長い』とは言いたくないのですが、この間、硬蛋白質利用研究施設は本学の重要な研究拠点の一つとして大いに発展してきたことは間違いございません。これからも研究分野において世界的な貢献ができる重要な研究拠点の一つとしてさらに発展していただきたいと思っております。

先程西山施設長の説明にもございましたが、当時の文部省と通商産業省のご支援で、今では想像の出来ないような純増の形で硬蛋白質利用研究施設を設置することができました。その意味でも大変貴重な施設と考えております。現在は、今持っているものの一部を削って新しいものに変えていく方策が基本になっている時代です。現在純増で一つの組織を作るというのはほとんど不可能です。その意味でも、硬蛋白質利用研究施設には今後とも農工大学を特徴付ける重要な施設として大いに発展して頂きたいと思っております。大学を運営する立場からみても、農工大学が世界的な教育研究拠点大学となるための重要な位置を占める研究施設と思っておりますので、今後とも強力にサポートしていく所存でございます。

これまで色々な形でこの施設をサポートして下さいました皆様、特に文部科学省、経済産業省の方々には心から御礼申し上げますし、これからも色々な形でのサポートをお願いできればと思っております。また、日頃、共同研究等でご協力を賜っている企業の関係者にも感謝申し上げます。

この硬蛋白質利用研究施設が今後とも大いに発展していくことを願ひまして、私の挨拶に換えさせていただきます。本日は本当におめでとうございました。



平成21年5月16日
東京農工大学 学長 小畑 秀文

(3) 東京農工大学 國見裕久 農学部長挨拶

本日は、ご多用中のところ本学農学部附属硬蛋白質利用研究施設の設立四十周年記念式典・祝賀会にご出席賜り、誠にありがとうございます。農学部長として、一言ご挨拶申し上げます。

本研究施設は、我が国唯一の皮革及び硬タンパク質の応用科学研究を推進する研究施設として昭和四十四年に設立され、六年後の名称変更を経て今日の発展をみております。設立に当たりましては、当時の通商産業省及び文部省のご配慮により、全ポストを純増としてお認めいただきました。ご配慮いただきました当時の通商産業省及び文部省の担当者に改めて深甚の謝意を表します。昭和四十年代は、本学農学部では、大学院農学研究科修士課程の発足、新たに二学科の新設による九学科編制の確立、また、研究棟の新営等が相次ぎ、本研究施設の設立は、本学農学部の大きな発展の象徴の一つでもありました。本研究施設は規模の小さな研究施設ではありますが、今日までの四十年の長きに亘り、設立理念に沿って多くの特色ある研究成果を輩出して来られました。この間、本研究施設に対しまして、学内外関係各位からの温かいご理解・ご支援を頂戴いたしましたことに深謝いたします。また、歴代の施設長始め専任研究員等のたゆまない研究の展開、研究に基づいた本学教育への寄与、並びに、産業対策上も有益な実用的成果を通じた社会への貢献を重ねて来られたことに深く敬意を表します。

国立大学の法人化に際しましては、将来の変革を展望し、いち早く学外の有数な研究機関と研究協力協定を締結して研究分野の充実・拡大に努め、コラーゲンを始めとする硬タンパク質資源の総合的高度利用に貢献する研究と教育を推進する、特色ある研究拠点としてさらに整備を進めつつあります。国立大学における研究と教育の在り方について様々な指摘が行われている今日、係る独創的研究を鋭意積み上げて斯学の発展に寄与し、社会の要請に適確に対応した使命志向の研究拠点として発展されることは、極めて意義深いものと思います。本研究施設のさらなる発展を期待し、また、本学農学部はもとより本学の一層の発展に寄与されることを祈念しております。本日もご列席の皆様方から、さらなるご指導ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます、ご挨拶の言葉とします。

平成21年5月16日

東京農工大学農学部長 國見 裕久
<代読>

東京農工大学評議員 高橋 幸資



来賓祝辞

(1) 衆議院議員 西川公也 先生祝辞

本日は、東京農工大学農学附属硬蛋白質利用研究施設の設立四十周年記念式典を迎えられるに当たり、心からお祝いを申し上げます。

貴研究施設は、当時の文部省の異例の措置で設置認可を受け、わが国唯一の研究施設として設立されて以来、四十年の長きに亘り、皮革及びコラーゲンを始めとする硬タンパク質資源の高度利用を担う関連産業に対する学術的、技術的支援、並びに、人材育成に寄与する研究・教育を鋭意推進され、かつ、本日も大勢の卒業生が列席されているように、多くの有為な人材を世に送り出されて来られました。また、当時の通商産業省の所管する産学官共同研究プロジェクトを、全国の関係機関を束ねて三十年に及ぼんとする長期に亘り推進され、極めて有益な実用的成果も次々上げられ、その成果が産業対策上も活用されていると聞き及び、国政に携わる者として、また、同じ大学の卒業生として、この間の文部科学省及び経済産業省始めとする関係各位のご支援、及び貴研究施設の歴代の専任研究員の多大なご努力に深甚の敬意を表します。

我が国の内外を取り巻く環境は大きく変動し、国政の舵取りが益々重要度を増す中、国立大学における研究と教育、また、農林水産業・国内製造産業の在り方について様々な指摘が行われている今日、貴研究施設のように、斯学の発展に寄与し、産業界を始めとする社会の要請に適確に応えられる研究をたゆまず推進するとともに、学部及び大学の教育に貢献することは誠に意義深く、今後とも特色ある研究拠点として益々発展されることを大いに期待します。貴研究施設の将来に亘る発展を通じて、貴学農学部、ひいては貴学がさらに一層発展されることを祈念してお祝いの言葉とします。

平成21年5月16日
衆議院議員 西川公也



(2) 文科省研究振興局 磯田文雄 局長祝辞

東京農工大学農学部附属 硬蛋白質利用研究施設の設立四十周年記念式典が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

本研究施設は、昭和四十四年に、皮革研究施設として設置されましたが、その創設の背景には皮革産業の弱体化問題への対応等があり、産業界からの強い要望もあって、当時皮革製造化学やコラーゲン、ケラチン、エラスチン等の硬タンパク質の利用研究で多くの研究実績を有していた東京農工大学農学部において継承・発展させることになった次第です。



そのような経緯もあり、本研究施設の組織体制整備に当たっては、当時の通商産業省から教授相当職二名分を文部省に移管するとともに、文部省においても助教授二名、助手二名、技官一名、事務官一名を純増するという格段の措置が講じられております。

昭和五十一年には、硬タンパク質研究の拡充、産業面への応用など社会の要請に一層適切に対処できるよう改組すると同時に、施設名称も「硬蛋白質利用研究施設」に変更され、今日に至っております。

これまで一貫して、硬タンパク質資源の高度利用に係る研究を推進され、例えば、最近の取組みとして、世界で初めてマリンコラーゲンの商業生産を可能とし、年商7億円のサメ皮由来コラーゲンを主体とする機能性食品、化粧品等の開発や、新たな素材である熱可塑性樹脂、ミネラルキレート高濃度有機液体肥料の開発など、有益な実用的成果を数多く生み出されてきており、社会の要請に応えられてきたことは極めて意義深いものと存じます。

最後になりましたが、これまで本研究施設を支えてこられた関係者の皆様に対し深く敬意を表しますとともに、本研究施設はもとより東京農工大学の今後益々の発展と御臨席の皆様の御隆盛を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

平成21年5月16日

文科省研究振興局 局長 磯田文雄

(3) 経産省製造産業局 細野哲弘 局長祝辞

「硬蛋白質利用研究施設設立40周年記念式典及び祝賀会」の開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、記念式典と祝賀会が本日、内外の多数のご来賓をお迎えし、盛大に開催される運びとなりましたことを心からお慶び申し上げます。

硬蛋白質利用研究施設は、旧通商産業省工業技術院東京工業試験所皮革部門が担ってきた工業標準化の推進や啓蒙活動といった社会的役割も継承しつつ、さらに発展させるかたちで、昭和44年、「皮革研究施設」という名称で、東京農工大学農学部附属として設立されました。

この後の我が国皮革産業を顧みますと、昭和40年代の発展期、昭和50年代から60年代にかけての国際化への対応、そして平成初めのバブル経済期に生産のピークを迎え、その後は国際競争が徐々に激化してくるという、めまぐるしい状況の変化がありました。

こうした中で、皮革産業の発展に技術面から貢献してきた当施設が、その時代の求めに応じた研究内容や名称の変遷を経て、今日まで設立の趣旨を脈々と受け継ぎ、硬蛋白質利用研究施設として、設立40周年を迎えたことに、誠に深く感銘を受けています。

御高承のとおり、歴史と伝統に生まれ、高い技術と豊かな創造性を培ってきた我が国皮革産業は、品質や安全性に優れた製品を提供してきました。他方、今日、皮革先進地域である欧州からの高価格品、中国や途上国からの低価格品の流入により、厳しい国際競争に直面しています。また、百年に一度と言われる不況の中で、消費低迷の影響を強く受けています。

こうした状況を打開し、我が国皮革産業が飛躍を遂げるためには、より品質や安全性に優れた皮革の生産を追求するとともに、国産皮革・皮革製品の優れた価値を国内外に強く訴え、そのブランド力を高めていくことが重要です。

ゼラチンやコラーゲンについても、同様に、より高品質な製品づくりにより、消費者の安心・安全に対する意識の高まりに応えていく必要があると考えています。

経済産業省としましては、こうした問題意識に立って、エコレザーの普及や国内外の見本市への出展を支援するなどの取組を実施し、微力ながら皮革産業の振興に努力しています。

硬蛋白質利用研究施設関係者の皆様におかれては、硬蛋白質の高度利用の研究を通じ、引き続き皮革産業の発展に寄与していただくことを期待しています。

最後になりましたが、貴大学及び硬蛋白質利用研究施設の今後益々の御発展と、小畑秀文学長、西山敏夫施設長をはじめ大学関係者の皆様、御列席の皆様方の御健勝を祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます。



平成21年5月16日

経済産業省製造産業局長
細野 哲弘

<代読>

経済産業省製造産業局

紙業生活文化用品課長
進藤 秀夫

鏡開き

文部科学省研究振興局 磯田文雄局長、経済産業省製造産業局紙業生活文化用品課 進藤秀夫課長、小畑秀文学長、西山敏夫施設長の4名が、「よいしょ、よいしょ、よいしょ」の掛け声を来場者一同の声を合せて鏡開きをおこないました。



乾杯

笹尾彰本学理事のご発声により乾杯を行いました。



祝電

東京農工大学農学部附属硬蛋白質利用研究施設設立40周年記念式典のご盛會を心よりお慶び申し上げます。

これまでに、研究に従事され、多くの成果をあげてこられた皆様方の活動に敬意を表すとともに、研究施設のさらなる発展をご祈念申し上げます。

衆議院議員 林田 彪（昭和42年卒）

「硬蛋白研40周年にあたって」

皮革研として創設され、硬蛋白研として発展してきた歴史を思い、将来のさらなる発展を願ってお祝いを述べます。

皮革をはじめ硬蛋白質の総合的利用ならびに関連した生物機能の開発利用という本施設の活動目的からみると、2部門構成の学部附属研究施設 という組織は一般的には過小という印象があるかもしれません。しかし施設自身のドクトリンとこれを支援する周りの人たちの思いは、とにかく小さい所帯ながらユニークな活動を目指すところにあると理解しています。

社会全体のグローバル化の傾向は、えてして社会の活動全体が特定分野や特定目標に過度に集中する傾向を加速しているように思われます。このような集中化の時代こそユニークな組織と活動を目指す本施設の存在意義が将来にわたっても強く意識されるべきだと思います。

40周年にあたり、施設の活動に多少とも参画した者としての思いを述べたく、欠席のまままでのお祝いのことばに換える次第です。

2009, 5. 16 白井邦郎



祝辞

(1) 日本皮革技術協会 杉田正見 会長祝辞

本日は、東京農工大学、硬蛋白研究施設40周年記念、誠にありがとうございます。最初のご挨拶で、昔を振り返り、将来に向けて、というようなお話がありました。そこで私自身昔を振り返ってみますと、44年6月に(硬蛋研が)創立されたとき、私は31歳で、皮革のことも何もわからないという状況で、兵庫県の試験所に勤めておりました。当時は公設の皮革研究機関と言っても、人員、施設、能力とも不十分で、大阪、兵庫、和歌山くらいにしかありませんでした。今日のビラの中に、東京工業試験所が廃止になり、皮革の



試験研究機関がいかにかどうあるべきか、という時に皮革研究施設ができたとありました。44年頃の皮革産業の状況を振り返ってみると、輸入革と国産原皮を使い約1000万枚の生産をしていました。それが10年ほど続き、皮革産業は成長期でしたが、排水や副廃物の問題が生じてきました。そういった問題に対して、この研究施設にいろいろな面で指導をして頂き、一緒に取り組んできました。そういうことでも非常に功績の高い研究施設だと私は思っています。現在私は、平成11年から、この研究施設の先生方の後を引き継ぎ、日本皮革技術協会会長を務めさせていただいております。皮革業界は、44年当時、1000万枚生産していましたが、現在は300万枚にとどまっております。このような状況の中で、この研究施設には、やはり指導的立場で皮革産業を導いていくという役割を担っていただきたいと考えております。この40周年という年を飛躍の年にして益々発展して頂くということと共に皆様の益々のご健勝を祈念して、ご挨拶にさせていただきます。

(2) 茨城大学農学部 米倉政実 教授祝辞

茨城大学農学部の米倉でございます。

茨城大学は宇都宮大学と農工大学と連合農学研究科という形でドクターコースを作っております。そういったなかでやっておりますので、参与研究員の代表という立場にはないのですが、私に挨拶がまわってきたのかと思います。

西山先生をはじめ、少ないスタッフの中でこれだけの沢山の卒業生を輩出し、あるいは社会的、産業的な養成に、大学という立場にありながら様々な方面で貢献されていて、すばらしい成果をあげられていると思います。

最初にご挨拶がありましたように、今日の40周年という日は研究施設がリニューアルするの



非常にタイミングのいい時だと思います。世の中では変革や改革、あるいは改善などが大学も含めて沢山求められています。改革の革はなんでしょう。「カワ」だと思います。私の拙い知識によると、多分こういった新しい門出の時には、新しい革袋に、新しい酒を注ぐのだと昔聞いたことがあ

ります。新しい革袋のリニューアルされた研究施設が秋にはできるということですので、新しい酒は注ぎすぎず、西山先生をはじめ教職員の研究や教育に対する情熱を、あるいは学生さんの新しい若い力をどんどんそそぎこんでいただいて、新しい革袋が芳醇な酒の醸し出すところになるように祈っております。

どうぞ素晴らしい研究施設になることを記念いたします。
挨拶に代えます。

(3) (株)中華・高橋 高橋 滉 代表取締役社長祝辞

只今、ご紹介を頂きました中華高橋の高橋でございます。

本日は、東京農工大学、硬蛋白質利用研究施設、40周年、誠におめでとうございます。私どもの会社は、この硬蛋白質、コラーゲンの塊でありますフカヒレを製造、販売しております会社でございます。フカヒレといいますのは、みなさん御考えのとおり、サメのヒレでございます。まあ、このサメのヒレでありますフカヒレばかりがですね、こう、世の中で珍重されまして、それ以外の魚体の部分がですね、実は海洋



投棄、海の上で捨てられていたり、という実態が長らく続いているのが実態であります。我々もこのフカヒレで生計を立てております以上は、このサメに敬意を表してですね、ヒレ以外の部位にも、もっとも価値を高めなければならぬ、ということで、15年程前から取り組みをしております。このサメ全体の有効資源化、ということに取り組んでいるわけですが、6年程前、農工大学の先生がサメのゼロエミッションという取り組みをされている、と聞きつけて、その猛を称えて無理やりお願いをした、というのが我々のサメ肉の本格的な研究の始まりだったわけでございます。なかなか、サメ肉は、フカヒレと違って、フカヒレは皆さんの憧れですけれども、「サメ肉どうぞ」と言うと、「サメ肉なんかいらねえよ」と言われるわけでございます。こうした状況を変えない限り、サメが無駄に使われる、ということは絶つことはできないのではないかと考えております。そうは言いますが、サメの、サメ全体の有効活用の事業化、ということは、まだまだ課題が山積でございます。ただ、私がこの硬蛋研と出会ったことによって、ただただ夢と思っていた、サメの有効資源化事業が、現実のものとなるんだなと、信じることができ、そして、この事業に継続して取り組む、取り組む必要がある、そしてそれが間違っていない、という勇気を与えられました。実際に携わっていただいていたらっしゃいます野村先生を始めといたしまして、硬蛋研の関係者の方々にはこの場をお借りしまして、改めて御礼申し上げます。それから、是非、この我々の我儘を、引き続きお聞きいただき、サメを介した世の中への貢献にご協力をお願いしたいと思っております。最後になりましたけれども、硬蛋研の益々のご発展、それから、本日もご出席の皆さまのご健勝を祈念いたしまして、私の祝辞とさせていただきます。

本日は大変おめでとうございます。

(4) (株)資生堂 天野 聡 祝辞

本日は硬蛋白質利用研究施設40周年本当におめでとうございます。

我々は、皮膚の研究をしておりますが、化粧品会社としてメイクアップと、皮膚の本当の健康的な美しさを目指しております。皮とは違いますが、生きている皮膚の状態を良くしていくためには、やはり真皮、コラーゲンの研究が非常に重要であります。このことから長年の間硬蛋白質利用研究施設の方と共同研究をさせて頂いております。具体的には人口皮膚モデルや、皮膚のしわ形成における際の真皮の影響などについてご指導頂いております。

四十年も続くということは、歴代の先生方とそこに参加されていた研究者の方が素晴らしい成功をあげてきたということが今日につながっているからであると思います。今後も新しい研究施設ができ、新しい雰囲気のもとですばらしい研究をされると思います。

今後ともすばらしい研究がすすむということを祈念して、簡単ですが私のご挨拶とさせていただきます。どうもおめでとうございます。



(5) (株)日本航空 塚本裕司 機長祝辞

只今ご紹介に与りました塚本です。

本日は硬蛋研 40 周年ということで真におめでとうございます。また、今日お手伝いを色々として下さっている学生の方々、本当にどうもありがとうございます。実は私も只今 40 周年を迎えてまして、硬蛋研と同じ 44 年の生まれでございます。今日久しぶりに学校の先輩方、また先生方、当時硬蛋研にいらした方とお会いして、一番びっくりしたのが、皆様、あまりに変わらないことにびっくり致しました。中には若返ってすらいる、どちらかというところと恐怖すら覚える方もいらっしゃる、今日この場にきて本当によかったなと、思っているところでございます。私 40 歳なりに昔自分が学生だった頃をちょっと振り返ると、私が学生だったのは今から 15 年から 20 年ぐらい前です。当時硬蛋研は今ほど学生がいなくて、私を含めて 2、3 人の学生しかいなかったもので、実験なんかもやり放題です。ね、器具も取り合いにならないし、機械も取り合いにならない、非常に恵まれた環境にありました。そんな私の硬蛋研での生活は、早起きして学校に行くと、何故か先生方みなさんいらっしゃる、昼間は硬蛋研の屋上でよく日向ぼっこをしていました。午後から部活に出かけて、主に実験をしていたのは夜中にやっていました。夜中に音楽をかけて歌いながら実験をするという生活を、学部それから大学院を含めて 3 年間、硬蛋研で送らせて戴きました。そんな、実験に勤しんでいた私がどれくらい硬蛋研で苦勞したかという、実は、大学院を出て、会社に入ってから数年の間、修士論文が書けない夢に何度もうなされました。また夢の中では、いつも電気泳動を行っていて、学生でこなしたよりも多く、夢の中で電気泳動を行っていた気がします。そんな私を社会に送り出してくれた硬蛋研が、今後も一層栄えて、また 50 周年 60 周年、私と同じく周年を重ねられることを、今日この場でお祈り申し上げます。本日は誠にありがとうございます。



出席者名簿(名称略)**来賓**

衆議院議員

西川 公也

文部科学省研究振興局長

磯田 文雄

文部科学省学術機関課研究調整官

小山 晴己

経済産業省製造産業局長

細野 哲弘

経済産業省紙業生活文化用品課長

進藤 秀夫

本学関係者

東京農工大学学長

小畑 秀文

東京農工大学理事

笹尾 彰

東京農工大学理事

竹本 廣文

東京農工大学農学部学部長

國見 裕久

応用生物科学科

高橋 幸資

矢ヶ崎 一三

三浦 豊

好田 正

獣医学科

渋谷 淳

現専任研究員

西山 敏夫

新井 克彦

野村 義宏

新井 浩司

松永 あや子

元専任研究員

元専任研究員

長南 康正

東京農工大学名誉教授

久保 知義

東京農工大学名誉教授

白井 邦郎

東京農工大学名誉教授

上原 孝吉

東京農工大学名誉教授

石井 泰博

元兼任研究員

東京農工大学名誉教授

和田 敬三

東京農工大学名誉教授

小川 益男

東京農工大学名誉教授

伏谷 賢美

現・元参与研究員

資生堂(株) リサーチセンター

天野 聡

味の素(株) ライフサイエンス研究所

丹尾 式希

神奈川歯科大学歯学部

畑 隆一郎

(株)ニッピ・バイオマトリックス研究所長

服部 俊治

日本ハム(株) 中央研究所長

森松 文毅

茨城大学農学部

米倉 政実

都立皮革技術センター

吉村 圭司

食品膜・分離技術研究会 会長

渡邊 敦夫

元参与研究員

今井 哲夫

元参与研究員

白山 琢持

元参与研究員

中村 蔚

元参与研究員

宝山 大喜

元参与研究員

元吉 治雄

関連機関

(社)日本皮革産業連合会 会長

大澤 重見

(社)日本タンナーズ協会 会長

竹内 克明

日本皮革技術協会 会長

杉田 正見

都立皮革技術センター長

川原井 通義

都立皮革技術センター

寺嶋 眞理子

岡野 良夫

高瀬 和弥

鈴木 興輝

大阪府立産業技術総合研究所

皮革試験場 所長

稲次 俊敬

兵庫県皮革工業技術支援センター長

中川 和治

(財)日本皮革研究所長

小山 洋一

(財)日本皮革研究所

大形 公紀

帝京平成大学

林 利彦

関連企業

(株)アオキ 代表取締役社長

青木 英彦

(株)アナテック

鈴木 信弥

特許業務法人 アルガ特許事務所

山本 博人

(株)池田理化

岡部 和徳

佐藤 正男

大倉フーズ(株) 代表取締役社長

下間 博明

大阪化成(株) 代表取締役社長

相原 道郎

角光化成(株) 代表取締役社長

角田 雅俊

(株)加藤美蜂園本舗代表取締役副社長

加藤 禮次郎

キスコ フーズ(株) 代表取締役社長

涼野 友康

キスコ フーズ(株)

内藤 誠

(株)久世 代表取締役社長

久世 健吉

(株)久世

和井田 堯彦

クシエホームプロダクツ(株)研究所長

新井 清

(株)栗本鉄工所

福井 武久

甲陽ケミカル(株)

信夫 正

(株)さわやか元気

鈴木 佐紀子

山崎 博子

(株)資生堂 食品研究開発センター食品

開発 G

内山 太郎

(株)資生堂 リサーチセンター

岸本 治郎

日比野 利彦

ゼリア新薬工業(株) 中央研究所

三浦 直良

岡 秀樹

チッソ(株) 横浜研究所

黒川 泰弘

(株)中華・高橋 代表取締役社長

高橋 滉

(株)中華・高橋

岡 正史

今井 直也

宮田 正彦

東洋羽毛工業(株) 代表取締役社長

柳場 弘

東洋羽毛工業(株)

見城 静司

(株)東洋理工 代表取締役社長

横山 真喜男

(株)ニッピ 常務取締役

一蝶 彬

日本ハム(株) 中央研究所

高畑 能久

(株)ヌル 代表取締役社長

門角 稔仁

平金産業(株) 代表取締役社長

長島 十己知

(株)ホソカワ粉体技術研究所

笹辺 修司

ホームアイオン研究所

市川 秀之

秋本 龍二

(株)松永商会

布施 隆

鈴木 康宏

明誠企画㈱ 代表取締役社長
向井 明
メルクス㈱ 代表取締役社長
榎田 了
(株)ロッテ中央研究所
桜井 孝治

卒業生・修了生・在学生

服部 次男 S26 学部卒
赤羽 競 S29 学部卒
沢野 勉 S32 学部卒
須田 浩行 S34 学部卒
田中 治夫 S34 学部卒
櫻井 邦雄 S37 学部卒
高藤 慎一 S39 学部卒
玉城 武 S43 学部卒
寺岡 葉子 S51 学部卒
横山 直樹 S53 学部卒
高島 昭彦 S55 学部卒
金田 幸裕 S56 学部卒
増田 隆 S58 学部卒
藤本 貴信 S56 学部卒
高田 幸宏 S60 修士卒
平塚 義治 S60 学部卒
高松 信一郎 S63 修士卒
波多野 和広 H 2 修士卒
白井 幸吉 H 4 修士卒
塚本 裕司 H 5 修士卒
伊東 さやか H 9 学部卒
水谷 天洋 H 9 修士卒

土岐 真治 H10 修士卒
中戸 英俊 H10 修士卒
江波 戸天仁 H11 修士卒
鈴木 紀久江 H11 学部卒
藤田 亜希子 H11 学部卒
青木 一真 H12 修士卒
阿部 淑子 H13 修士卒
井出 大悟 H13 修士卒
阿部 直行 H13 学部卒
石岡 樹成 H13 学部卒
鎌田 憲光 H13 学部卒
名越 季徳 H13 学部卒
谷 安代 H13 学部卒
柴田 直子 H14 学部卒
高津 仁志 H14 学部卒
鉛 佳都 H14 学部卒
中島 大輝 H15 学部卒
竹場 菜央子 H16 学部卒
藤井 佳子 H16 学部卒
藤井 景子 H16 学部卒
津田 祐一 H16 修士卒
厚木 徹 H16 修士卒
金本 嘉史 H17 修士卒
中川原 康介 H17 修士卒
柴田 丞 H17 修士卒
藤野 賀奈子 H17 修士卒
堀井 香織 H17 修士卒
赤坂 将史 H18 学部卒
赤松 渚 H18 学部卒

原 真佐夫 H18 学部卒
清水 健司 H18 修士卒
田中 美登里 H19 修士卒
村澤 知佳子 H19 修士卒
伊藤 嘉奈子 H19 修士卒
杉本 真美 H19 修士卒
小池 朋 H20 修士卒
工藤 千香子 H20 修士卒
鈴木 まゆ H20 修士卒
小野 真梨子 H20 学部卒
勝山 理沙 H20 学部卒
青木 陽平 修士2年
河田 紘史 修士2年
佐藤 憲一 修士2年
上原 一貴 修士1年
薦野 裕加 修士1年
中村 陽平 修士1年
並木 郷 修士1年
川原 美紗江 学部4年
林 晃 学部4年
出島 この美 学部4年
板垣 慈 期外
北浦 敏彦 期外
三浦 大樹 期外

(H21.5.16)



「収入」		
会費	15,000円 × 153名	2,295,000
お祝い金		505,000
収入合計		2,800,000
「支出」		
宴会費用		1,773,240
通信費		11,370
印刷代		168,985
事務費		41,970
振込手数料		16,500
花代		23,100
会議費		116,150
雑費		8,685
支出合計		2,160,000
残高*		640,000

*、残高金に関しては硬蛋研の今後の発展のため
大学に委任経理金として納入しました。

あとがき

開設40周年を記念し、来賓として西川公也衆議院議員、文部科学省研究振興局 磯田文雄局長、文部科学省学術機関課 小山晴己研究調整官、経済産業省紙業生活文化用品課 進藤秀夫課長、本学 小畑秀文学長、笹尾彰理事、竹本廣文理事を迎え、本学関係者・共同研究企業・卒業生を含めると168名にご参集いただきました。また、関係各位からのご寄附、ご寄贈をいただき、祝賀会を主催する硬蛋白質研究施設 職員一同、感謝の念に堪えません。これも皆様方の当施設への叱咤・激励と思い今後の活動に繋げてゆきたいと思ひます。ここに、40周年記念式典および祝賀会の概要を纏めさせていただきました。40年を一つの区切りとして、更なる発展のため職員一同、粉骨砕身、努力してまいります。祝賀会では、至らぬ点多々あったことを心よりお詫び申し上げます。(YN)

寄付金 (敬称略)

アナテック(株)	(株)松永商会	
(株)池田理科	宮崎化学薬品(株)	
大阪化成品(株)	明誠企画(株)	
島津サイエンス東日本(株)		
(株)シュガーレディ化粧品	理事	笹尾 彰
東洋羽毛工業(株)	農学部長	國見裕久
(株)ニッピ	昭和44年修士卒	石井泰博
(株)ニッピバイオマトリックス研究所	昭和55年学部卒	青木 清
日本ハム(株)中央研究所	平成 8年学部卒	品田亜紀子
日本フリーザー(株)	期外	加治屋健太郎
福栄肥料(株)		

寄贈 (敬称略)

大倉フーズ(株)	
(株)久世	
(株)中華・高橋	
明誠企画(株)	
昭和43年卒	玉城 武
昭和62年卒	桑葉くみ子
甲陽ケミカル(株)	高森 吉守